

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	雑報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 53: 61-74
Issue date	1897-02-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4761
Right	

○明治三十年と迎ふ

天廻り、天轉じ、一陽來復歲華聿に新にして又明治の丁酉を迎へたり。聖代重ね來りて已に三十年、古人も三十にして立つといへり。吾帝國の新生活も早や成人の群に入り、着々と迄進運に向へるは喜ぶべきことならずや。然れども此年を迎へたる吾人は、吾人の學び得たる學術と手腕とを以て、此尊ぶべき帝國の文明に貢獻すべきの時期、更に一年を近かめたるを覺悟せざるべからず。請ふ今年をして昨年末の悔を繰返さしむる勿れ。今年頭に際して昨年の事を一顧すれば、恍として夢の如く、我殆ど何を學びたるやを知らざるなり。然れども爰に大に望を屬すべきは、校内一般に學術の精勵に向ひたるが如き觀あると是なり。一例を擧ぐれば所謂課外講義なるものゝ、外國語を始めとして諸科の上に及ぼし、或は曉鴉一聲、紅日未だ阿蘇の雪嶺を出でざるに際し、雪の如き霜を踏破し來りて堂

に上り、或は課了りて講堂聲音稀なるの所、一室に師の講義を傾聽するなど、何れか喜ぶべき現象にあらざらむ。特に近來寒稽古の催しあるに臨み、數刻憂々轉々の間に心身を鍛ひ、凜然たる餘勇直に又課外講義の席に列するものあるが如き、吾輩の感服措く能はざるところのものなり。然れども後者の如きは未だ幾人を以て數ふるのみ。多數の諸子に向ては又吾人は學科の精勵と同時に、心身の修養を忘れざらんことを望まざるを得ず。籠を得て蜀を望むは人の情なりとせば、吾人も亦諸兄に向て蜀を望まずんばあらず。曰く枝葉の學に渡るを以ての故に、その品性を進め、氣概を養ふことを遺るゝ勿れ。曰く學科に精勵なるを以ての故に、その軀軀を練り、豪氣を養ふことを忘るゝ勿れと。學問は蓋々濟世の利器なり。然れどもその末に走るときは、多くはこれ小人物を造るのみ。苟も高遠の理想を抱き、雄大の事業を懷ふものは先づ己れの人物を偉大ならしめん事を考へざるべからず。近來天下の青年學生たるもの、或はその本末を轉倒するなきか、技藝に機敏にして一方に弱行なるものな

きか、虚譽を逐はんが爲めに小才を弄するものなきか。凡そ世は小才子跋扈の世より危険なるはあらず。吾人は大に熟考一番せざるべからざるなり。

以上は、近來我校一般に銳意精勵なる喜ばしき傾向を見て歓迎し、我校の爲めに之を喜ぶことの功なるの餘まり、之を言ふに頌を以てせずして規を以てせんと欲し、偶々年頭に際えたれば平素天下の學生に對して慨する所を陳じて、以て諸兄の一顧を仰ぎ、學問の精勵に加ふるに更に心身の修養を以てし、如斯にしてその完璧に近からんことを望むものなり。吾人不肖といへども職筆硯に従ふ。諸兄の驥尾について聊盡すべきを盡さんとす。請ふ今年をして更に有爲の年たらしめよ。

端艇部遠航

(吞天、松篁共誌)

我校端航の設あるや、實に昨年一月にあり。爾來年を経ること、僅かに一星霜、然れども部員の熱心と剛毅とは、此短日月の間に此部をして、盛大の運に達せしめたり。赫灼たる炎天にも、凜烈た

る寒候も、未曾て江津の湖上、汗水を滴らして、漕艇に餘念なき壯士を、見ざることもなかりき。逆風怒號し、奔雷轟く時もなほ、白三條の艇旗の、湖上に出没するを、認めざることもなかりき。於是乎其術大に進み、今や其技大に見るべきものあるに至れり。試に思へ。二百壯士の健腕よく、此一小湖面に充つるや否やを、嗚呼僅々たる一小湖、豈久しく、是等壯士の鐵腕に充たんや。思ふに我黨の士は、是西隅の潜龍なり。漕艇の術、未大成に至らずと雖、一旦時を得ば、將に雄名を天下に擧げ、鹿を中原に驅らんと欲するもの、焉んぞ一小湖に躊躇し、空しく井底の痴蛙たちむや。當に大海を航し、雨に沐之風に櫛り、百難を排して、鍛煉の功を、積まざるべからざるなり。有明の海、波濤汪洋たり。風光明媚の稱西海に鳴る。我に此鐵腕あり此海灣あり、吾儕豈決する所なかるべけんや。回顧すれば、昨年四月春期休業中、有明海遠航の議は期せずして、會員の間に起れり。然れども遂に故あり、其議を中止するの止むを得ざるに至れり。會員の失望果して如何なりとぞ、十二月下旬、端艇大修繕成る。艇舳各

其艇號を記さ、美觀却て其初に勝れり。於是乎遠航の事を、會長部長に請ひ、其の許可を得。之を衆に募る。應ずる者四十を以て數ふ。然れども、一艇五人以上を容るべからず。之を抽籤に付す。當撰するもの十五人、即ち一月四日を期し、纜を解き遠航の程に上る。今其の梗概を録し、後日の追想に供す。文辭粗雜、遠航の真相を盡さざるを恨む。

四日。夜來の風雨未全く歇まず。滿天墨の如く、檐滴點々たり。五時半藤崎神社境内に至る。時に雨止み數星微光を洩らし、東天漸く白く鷄鳴類なり。然れども衆未だ全く來らず。人面辨するに及びて發し、神水村艇庫に向ふ。行装頗る奇異、或は外套を纏ひ木屐を穿てる、和洋折衷の先生もあれば、何物とも知れぬ大包を背負ひし、質入らしき御方もあり。談笑百出意氣昂がり、興に乗じて、滔々たる雄辯を振ふものあり。或は本妙寺と呼び、羅漢と云ひ、異名校學に違あらず。道路泥濘、幾度か脚を失せんとし、衣裾點々泥土に染む。已に迄達し艇を曠す。花岡舵を損す。乃ち川尻に至り之を修めんとす。時に小笠原氏未だ

來らず。已にして對岸の堤上、一巨漢の大呼するあり。龍田號を出して、之を驗すれば則ち小笠原氏なり。衆大に喜ぶ。是に於てか艇員全く集まる。十時纜を解く。三艇舳艫相啣み、金峯先たり、花岡中にあり、而して龍田殿にあり。衆漕服を着け、彩帽を戴き、艇旗艇尾に翻る。時に雲漸く破れ、日光暖かに、寒風時に來りて、額上の汗滴を拂ふ。櫂端靜水を截りて、湖底の潜鱗を驚かし、恰も大鳥の水を掠めて飛ぶが如し。日頃狹しと思ひし湖面は、益狹く氣盛り心鬱するを覺ゆ。乃ち腕に任せて力漕すれば、艇は已に中の瀬橋下にあり。乃ち小憩す。忽ち見る堤上一馬車の過ぐるを、御者騎兵一等卒の服を着し、鞭を上げて意氣揚々たり。輕口生問ふて曰く、是軍用馬車なりやと、衆大に笑ふ。蓋し生其の軍服を着するを見て、直ちに之を、真正の兵士と信ぜしものか。

已にして竹谿を過ぐ。竹谿とは嘗て我校生の名くる所、兩岸竹林相連ること里餘、時に鶯語啼啼として、竹隱に滑らかに、碧流潭るが如く、幽邃極りなし。之を過ぐれば、左方一小堤を隔て、綠川の流聲を聞く。一行是に於てか勇氣百倍す

蓋已に川尻に近きを知ればなり。已にして黒町橋見ゆ。凡そ江津より川尻に至る間、此所を以て最も難所とす。川流激甚白沫飛散し、殆んど一大瀑布の如く、直ちに岸を衝きて右折すれば、僅かに數間にして橋あり。艇長叫んで曰く、オールの操縦を敏捷にせよと、乃ち相勵まして進めば、少時にして艇は激流に入る。飛沫艇に入り心身共に冷を覺ゆ。あわや艇は對岸の大石に衝突して、微塵に碎かれんとす。舵手悠然として舵を右に曲ぐれば、艇は忽ち右方に向ひ、苦もなく橋下を過ぎ、前方近く川尻を望む。水甚だ淺く船底憂々とぞて聲あり。各艇盛にへピーを連呼す。然れどもなほ膠せんとするもの數度、正午川尻に着し、艇を繋ぎて晝食す。石坂富田の二氏は着岸後、直ちに上陸して艇具の修繕に忙はしく、又晝食するの閑を得ざりき。町民の來りて我艇を觀る者實に夥しく、石階に据し艇の異様にして、且其速力の大なるを驚く。一時十分出發す。時恰も退潮に際し、艇の進行頗速に、先に帆走せる船を、援ぐもの幾何なるを知らず。下るに従ひ、河幅漸く大に、風も亦益強く、濁浪従ひ起る。漕ぐこと三

時餘、纔に二丁河口に達す。時恰も干潮に際し、長洲遠く海中に突出し、船舶の坐するもの幾何なるを知らず。魚介を拾ふもの、水を渡り砂を探るもの幾千百人、衆之を見て漕ぐこと悠々、已にして艇底音あり。忽ちにして進行を止む。蓋水淺く艇膠するなり。乃ち袴を脱して徒涉し、艇を曳くこと數十間、未だ深所に出づる能はず。反りて其淺さを加ふるのみ。時に漁人數名漁舟を荷ふて過ぐ、乃ち近津に向ふの航路を問ふ。答へて曰く前面長く斗出せる、長洲を廻らざるべからずと、衆相見て茫然たり。辰儀を檢すれば已に四時を過ぐ。長洲の長さを量るに一里に近し。若き水深くんば一里を廻るに於て何かあらん。然れども水淺くして、此間常に徒涉せざるべからず。よし之を廻り得るとも、其の後更に數里を漕がざれば、近津に達すべからず。況や日は已に温泉の山上にあり。未だ半ならざるに日全く暮れん。陰曆二日のことなれば、舟路を照すの月光もなく、暗中に漂はざるべからざるや必せり。議論區々として決せず。或は曰く近津着は到底覺束なし。如かず住吉に至りて宿せんにはと、一人あり憤

然腕を握して曰く、精神一到何事不成んや。我元より不似と雖、亦是海國の男兒、素志を貫徹せよ。中途にして變せば、何を以てか我校友に見へんや。若し夫れ、近津に達するを得ずんば、艇中に眠るも可なりと、側歌ふものあり『憂きことぬ、なほ其上に、つもれがし。限りある身の氣力なぬさん』と、焉んを知らん。今日の苦は他日追懷の樂なるを、衆心乃ち決す。艇を下りて又曳き、各深所を撰びて進む。從て艇の順岸を失ふ、花園先であり、金峯中に、龍田殿にあり。龍田漁人に附ひて右折えて進み、はせの中に入り、花園は遠くはせの外を廻らんとし、金峯は艇を止めて傍觀じ、其の宜しきに從はんとす。已に迄龍田先づ膠着、亞で花園先づ浮び、水漸く深さを呼ぶ。稍ありて花園先づ浮び、水漸く深さを呼ぶ。金峯之に次ぐ。龍田獨り前の進路を取り、曳て進むこと頗遠く。辛うじて二艇に及ぶことを得たり。河口より此に至るまで參十分を費す。金峯山を目標とし力漕一番、進むに従ひ波漸く高く、艇は之に弄はれて上下甚し。已にして落日温泉山上に傾き、暮雲を染めて紅に波濤に反映し、紅波

を漂はし、白暘天に翔て鳴聲哀み、濯端水を截りて、音波上の浮鴨を驚かす。稍ありて日全く没し、暮色蒼然として來り。近津一帯の地は、已に雲烟杳靄の裡にあり。是に於てか進路を東北に取リ、力を極めて急漕す。北風濕衣を吹き、肌粟を生ず。加之飢渴一時に迫りて、氣愈衰へ、又如何ともするなし。時に吞天生平然艇中を探り、一小包を出して曰く、是或は以て一時の危急を救ふに足らんかと、包を開けば生餅二十餘ヶあり。乃ち之を各艇に分つ。衆相顧みて微笑す。

斯くて十五匹の風は、石の如き生餅をかじり終れば、胃腸少しく靜まり、再び勇を鼓して進む。海上愈暗ふして星益現はれ。水に映じて影動搖す。三艇相失せんことを恐れ呼應して進む。忽ち見る濯波を破る所、閃々として光あり。爲めに友艇の所在を知るを得たり。七時半近津に着す。時は一旅客あり。我艇隊の岸に着くを見るや、行李を荷ひて出で、嶋原渡海船ならずやと叫ぶ。一行答へて曰く、是第五高等學校の遠航艇隊なりと、旅客茫然度を失ふ。衆是に於てか大に笑ふ。委員先づ上陸して宿泊を談判し、傍ら旋緊場撰

び、艇を一小渠内に入れ、一全上陸宿に就く。直ちに晚餐を命じ、火を焚き衣を乾し一浴勞を慰す。回顧すれば、我艇の竣工して百貫石に着せしは、實に本月本日^に相當す。料らざりき一周年の今日、又此地に來らんとは、衆相顧みて一酌を議す。其遠航禁物なるを覺り、洪然一笑、禁すべからざるの情を忍び褥に就く。波聲松籟我眠を誘ふに似たり。

五日晴。早朝褥を蹴りて起き、先づ艇を檢す。異狀なし。乃海に沿ひて逍遙す。日後山より出で微光和に、海風颯々どえて征衣寒し。潮漸く滿て彼岸岩を洗ひ、雲霧海波を覆ひて温泉岳上半を顯はし、恰も『半峯以上是晴天』の觀あり。漁舟朝霧を破りて櫓聲急に、白帆風を孕みて半天に溯る。猶進みて海角を廻れば、宇土半嶋遠く海中に突出し、三角岳突兀として其端に聳ゆ。連山雲を帶び、遠くして淡く近くして濃に、湯嶋其の右にあり。煙波の裡、かすかに梯形を認む。岩角に石坂氏あり。佇立垂頭、時に頭を擧げ三角岳を望む。其狀何をか憂ふるものゝ如き。近づき之を見れば、磁石を手にし方向を檢するなり。焉ぞ知ら

ん、後霧大に起り、爲に目標を失し、磁石によりてのみ進まんとは。八時朝食を終へ、將に艇を駛せんとす。會蜜柑を賣るもの河内村より來る。乃購ひて艇に載す。猶昨日の轍に鑑み、水を具し甘藷を煮て携ふ。十時三十分解纜す。潮將に滿たんとして、艇膠する恐なし。即ち三角岳を目標として、一直線に進む。日光暖に恰も春和の如く、汗滴頬を流る。潮くに從ひ岸を離るゝこと、愈遠くして波益高く、遊鷗天に翔り、時に水を掠めて魚をつかみ、浮鴨波に群れ、舟に恐れて起つ。漁舟三々五々點々動かす。正に是一幅の好活畫、佳吉を幽に左斜に望む頃、風全く死乏波亦靜に、海霧大に起りて太陽光を隠し、忽ち目標を失す。乃磁石により、方向を西南に取る。若し石坂氏の方向を知るなからんには、其難實に言ふべからざるものありしならん。十一時休憩、晝食を喫し休むこと、三十分にして發す。三艇等しく並ひ進み、龍田は右に花岡は中に金峰左にあり。其狀競漕の如し。稍ありて龍田漕ぐことを弛べ、右方を見る。乃之を距る百メートル余、一大龜水上に浮ぶなり。衆異とす。進むに従ひ三角岳漸く見へ、中

神嶋現はる。中神は三角港灣口の一小嶋にまて水路を二分す。之を入れれば則三角港なり。衆皆其の近きを思ふ。既にまて港口に入る。忽ち鯨波起る。仰ぎ見れば小丘の上、兒童群集我行を見て叫ぶなり。情掬するに餘あり。恰も天津丸臺灣行に登らんとして、煤煙を吐きて茲に在り。乃之を中心として、遠航の歌

其 一

時は來にけり。いざ行かん。

榴さりなほせふなびこよ。

北のぜいかにつよくこも。

已がのすみはこゝにあり。」

漕ぎ行く海は名にしおふ、

君にこゝろをつくしがた、

たさへ、あら涙たかくこも。

いかで恋るゝこそやある。」

ぬれしころもは凍りはて、

みぞれは顔をうつこても、

たゞたのしさず添ゆかん。

いかでためるふ事やある。」

はやてさか涙ゆきみずれ、

しのぎ得てこそ、ゆく先の

はるかに見ゆる嶋のかげ。

笑顔たゝへてむかふなれ。」

其 二

年立ちかへるあらたまの、

春さはいへどまださむき。

頭もいさはすますらなが、

遠く乗り出すつくしがた。」

舟は木の葉のごさくにて、

波はやまよりたかけれど、

かこはやまその花ま呼ぶ、

筑紫のはてのなごなり。」

月にうかれてはなに酔ひ、

にしきかさりてたま炊ぐ、

人はしらじなゆめにだに、

かよふ事なきこのあろび。」

なみはくだけて玉さちり、

照る月かげははなまがふ。

あやつる榴のうのをさば、

天女の樂さきこゆらん。」

思ひいだせばそのむかし、

壽氷のあきのあき風に、

誘はれいでしものゝふが、

をはりも斯やありつらん。」

海はたきよりくれそめて、

鳴くや千鳥のこゑすなり。

魂をあらわすはすべし。

昔にち出され。」しづく、

疆のかれ葉のやわな。

なみのやみは響を打つ、

聲すあわたるちがせに、

曲調もいとおもとるわ。」

朝日まばゆいやあて、

海はかみのごさなり。

まなやり切つて見渡せば、

二三三ツ四ツ浮くかもめ。」

静さる漕ぎ、丈夫夫よ、

八里の潮路はあらむとも、

老れつみいかに深くとも、

恐るゝことのあるべしや。」

秋風をあやつるこの腕は、

其 國をあやつるかいなざり。

つゞかんがざり魂がざり、

さるゝあは合せていざ漕げよ。」

漕ぎのつづく露ほども、

たゆまず漕ぎよふな人よ。

八重の汐路のあなたには、

はな咲きみてる島もあり。」

波に浮かびてふねにふし、

幾度さためぬがざり、

漕ぎあはそをるはみも、

一小舟のさるゝ

國のためならなれり、
八重の潮路のりこえて、

今日かへり来る日の本の、

ますち猛男のむしさを、

語りつぎなんぞ代までも、

を歌ひつゝ、港内を一周し、鯨波三聲棧橋に着

く、時に午後三時なり。委員上陸、宿處を警察に

委し。繫艇所を水上警察に撰ばしめ、併せて其保

管を托す。衆上陸の用意をなし、猶艇に待つ、暫

くありて、委員陸上より信號を以て報じて曰く、

艇を其處に繋ぎ上陸こゝに來れど、乃上陸して

宿處に至り、再び艇を漕ぎて橋下に繋ぎ、市街を

散歩し、前の本縣知事富岡君の頌德碑を見る。碑

は町を距る數丁にあり。地廣濶ならずと雖、後に

青山を負ひ、前に碧海を扣へ、港内至る所見へざ

るなし。碑高さ二丈余鉄柵之を回らす、故北白川

宮殿下の篆額、故井上文相文を撰え、土井樵石之

を筆す。傍に五葉松一株あり。勳松と名く。蓋明

府本縣を治する年、其居宅に植うるもの、碑建つ

に當りこゝに移す。今枯る眞に惜むべし。既にし

て宿に歸り晚餐を終へ、大言壯語此行の平坦な

るを恨む。傍盛に骨髄を勞し、負る者罰として柑

皮一片を食ふを約す、負くるもの顔を憂め、苦味を忍びて食ふ。其狀眞に笑ふに堪へたり。勝負を争ふ事幾十回、時空しく移りて興未だ盡さず。割愛之をやめ、將に寢に就かんとす。後山の松籟高く響き、風伯暴るゝものゝ如し。時に委員艇を檢して歸り報じて曰く、滿天墨の如く又星光を見ず。赤燈高く懸りて沿海を警戒し、強風頻に吹て雨脚面を打つ。海波白馬の走るが如く、船燈爲に動搖すること甚しと。磊落生喜び叫びて曰く、此行平々坦々變化少く、遠航の感なし、宜しく金刀比羅大權現の加護を、祈るが如き怒濤に遭遇して以て、我腕を試むべし。今日の苦は、他日追想の好料たらずんばあらず、と意氣頗る昂る。時に辰儀十二點を報ず。即櫛に入る。

六日忽然呼ぶ者あり。曰く子等何ぞ速に起きざると衆驚き覺め、半睡の眼を摩して、之を見れば委員なり。蓋し昨夜の風濤、我艇を損せしや否やを恐れ、之を檢して歸れるなり。衆齊しく問ふて曰く、艇異狀なきやと、答へて曰く異狀なしと、時に天漸く明け東窓已に白し。試に窓を排すれば、夜來の風雨全く止み、一天晴朗にまて微風徐

ろに來り、爽快云ふ可らず。天我行に幸する多しと謂つべし。目を放てば、三角の一灣海波驚かず。對岸近く聳ゆるものは、大矢野嶋の諸山なり。大小の船舶阜頭に輻湊し、櫓頭林立す。十時出發す。此日龍田先たり、金峰中たり、花岡之を殿す。港民蜩集し我艇隊の出港を見る。一行腕の疲するを覺へず。威風堂々灣口を出づれば、昨夜の名残未だ全く靜まらず。進むに従ひ風益強く波益高く、澎湃鞺鞳艇を弄え、乍にまて上に、乍にして下に、漁艤帆船忽ち見はれ、忽にまて隠れ、飛沫時に漕衣を沾はす。櫓或ひは重く或は軽く、操櫓甚だ困しむ。然れども一行、豈此の如きの困難に屈せんや。力漕一番波を破りて進み、一時半綱田に上陸せ畫食す。此日金峰故あり、二艇に後るゝこと一千メートル餘、此に至りて追及す。バッテリー來るとの喧傳は、村民に傳はり、我先にと岸上につめよせ、一行を目まて水兵と誤認し、吉野か千代田か、本艦何れの邊に泊するやと、答へて曰く、余等は第五高等學校生徒なり、近海を航し、今朝三角より來り、川尻に向ふなりと、皆驚歎せざるなし。時に一人あり、飲料水を

汲み來りて我艇隊を勞す。朴訥の狀愛するに餘りあり。休憩すること一時間、二時半出發す。一小海角を廻れば、二丁河口眼前にあり。三時河口に入る。時正に退潮に際し、膠するもの數度、之を過ぐれば水再び深ま。日光水を射て漕者の眼を眩ます。衆色眼鏡を携へざりしを恨む。蜜柑に達する頃、夕陽已に沈み、歸鴉林に没し暮色蒼然、衆腕疲れ餓益迫り、携帶の甘藷又盡き如何ともすべからず。乃ち艇を寄せ、家につき食を求むれども得ず。飢を忍んで漕ぐ、暗漸く深くして星顯はれ、櫂端水を亂して影動搖、艇中燈なし。只四日の新月、西天に懸り微光を洩すあるも、尙人面を辨すべからず。況や我友艇を認むるの難きをや。三艇相呼應して進む。水流甚だ速にして、砂洲所々に出で、艇坐する毎に、下りて之を曳き、水深ければ、又艇に上る。此の如きもの、幾回なるを知らず。漕衣悉く沾ひ、寒氣益加はる。忽ちにして、二川相合する所に至る。或は曰く、是緑川、加勢川の、相合する所ならんと、或は曰く、否、是れ、河流の、一大嶋によりて、二分せられたるものならんと、議論囂々たり。試に、左を取り

て進めば、數間ならずして、艇は淺瀬に坐せり。乃ち兩流間の陸に上り、茫然とえて、佇立するもの少時。偶對岸の堤上、俗歌を唱へて過ぐるものあり、乃ち、大聲川尻に向ふには、右すべきや、左すべきやと問ふ。答を得ず。衆是に於てか、氣益あせり、動もすれば、互に相爭はんとす。時に、花岡最後により。二艇を呼んで曰く、左方已に不可なり。試みに、右せん、若し水深くして、其本川たるを知らば、笛を鳴らして之を報せん、公等暫く之を挨てと、右折して進む。斯くて、陸上にありし松篁生は、其嶋なるやを檢せんと欲し、左岸に沿ひて進めば、花岡艇に會す。是に於てか、始めて、其、龜洲と稱する一嶋なりしを知れり。全嶋、野草刺荆を生じ、鳥類の其中に宿れるもの、生が足音に驚き、逃るゝもの數十。生、歸り報して曰く、余が想像的中せり。何ぞ猶豫せん。速に右折すべと、意氣得々たり。已にして、一聲の笛聲は、暗を破りて、上流より來れり。二艇、是に於てか、之に従ひて右す。河岸高ふまて、愈暗く、流急にして、進行緩し。纔に、杉嶋に達すれば、轟々響あり。即、瀛車、緑川橋を過ぐるなり。之を距る、

十丁餘にして川尻あり。銳氣頓に加はる。少時に
して、艇又坐す。乃ち、之を曳くこと數丁。或は失
脚して、水中に倒るゝあり。或は角石を蹈みて、
足指を傷くるあり。稍にして、深處に出づ。朔風
濕衣を吹き、寒威凜乎、凍粟肌膚に生ず。勵聲一
番、勇を鼓して漕ぐ。川幅益狹く、上流より來る
船舶、時に艇を衝かんとす。舵手の苦思ふべし。
十時十分、川尻に着す。委員先づ上陸きて、旅宿
の周旋をなし。他は、岸上に火を焚き、以て暖を
取る。十一時、宿に就く。此夜、一行二分して泊
す。火を圍み、濕衣を乾かすあり。腹を抑へて、食
を促すあり。食膳出づれば、衆狂喜之に集り、飯
櫃殆んど空し。嗚呼、三十餘里の遠航は、今や、僅
かに三里を餘すのみ。豈祝せずして可ならんや。
乃ち、大杯を擧げて之を祝す。快談數刻、一時半
縛に就く。

七日曇。前日の勞苦未全く去らず。睡眼を摩して
褥を出で、良茶三椀心氣爽然食膳に向ふ。此日の
行程僅に三里余なるを以て、正午を以て發せん
とす。滿天雲深うきて細雨霏々として降り、檐頭
の點滴落ちて聲あり。既にして歇む。十一時三十

分、晝餐を終へ艇を曠し、一時纜を解きて流を溯
る。激流奔湍過ぎては又來り、急漕又急漕、流汗
岑々たり。加之雨又降り顔を打て冷々、衣濕ひて
凜を生ず。竹谿を過ぐる頃、雲わづかに破れ日顯
る。兩岸の人家點滴玉の如く、庭梅蕾を破りて芳
香を放つ。中瀬橋に至れば、岩佐山脇等の諸氏、
舟頭旭旗を立て、一行を迎へてこゝにあり。其無
事を祝し蜜柑餅等を贈らる。厚情謝するに餘あ
り。三艇是等の諸氏を分載し、龍田は舟を曳きて
霽湖に入る。愈狹きを覺ゆ。大坂出身の人々、又
我行を迎へ甘藷を煮て待つ。即中島に上陸き、休
憩すること時餘、午後五時艇庫に着き、萬歲三呼
各家に還る。

此行や、有明海濱最初の遠航に属し。程を合すれ
ば僅に三十餘里、然れども得る所のもの鮮少に
あらず。恐らくは次回の遠航に資する處、少から
ざるべしと信ず。嗚呼四日の航行、寒威凜烈の
候に際し、飢に襲はれ風に逢ひ、波に漂ひ暗に迷
ふ。孰れか筋骨を鍛ひ、心膽を練るの、料にあら
ずとせんや。今にして之を追想すれば、茫として
夢の如く、恍として幻の如し。讀者幸に、痴人夢

を語るとなす勿れ。
而して第一回筑紫紫海遠航艇隊艇員は實に左の如き。

舵手	野尻 龍	國澤 健雄	萩原 清彦
調整	長屋 脩吉	賴尊淵之助	石坂 二郎
三番	永井 專三	富田 定壽	津田安二郎
二番	小笠原長太郎	小川礎五郎	橋本 令亮
艇艙	戸次 正	松崎 求巳	田川 新吉

○擊劍柔道寒稽古開始

梅花稍く春信を傳ふるも、寒威尙ほ凜烈人の肌骨に泛す。此際に方り誰れか重衾を擁して安眠を貪るを欲せざらんや。而して我健兒の雄壯にして、慮るの遠き、特に此苦寒の候を擇び、新春第十一日拂曉五時より向三十日間を期して、演武道場、健闘叱咤龍拏虎躍の壯技を砌礎せんとす。其意氣洵に欽すべきに非ずや。顧ふに武の一事は我國建國の血脈、而して其字たる、義戈を止むるに在り。故に敬に對して機を制し、之に繼て勝を取る。勝を取るは勇にして、機を制するは知なるも、而も之を爲す所以は之を止むる所以にして皆行の一徳を出です。是豈市井の技と同

一視すべき者ならんや。故に技術の砌礎と俱に心念の修養を怠らずんば、其の效果の及ぶ所特に一校の風氣に關するのみならんや。雜報子寒稽古終結を待て、諸兄か氣焰の萬丈を望むや切なり。

○六花一掬

再ひ投書家に告ぐ。吾人は前號に於て投書家諸君に向て切りに論説の投稿を促せり。然るに幸にして諸君の留意するところとなり、爾來時々論説の投稿を受くるに至れり。而して雜錄欄は却て諸君に向て更に投稿を促すことの必要なるを見るに至れり。雜錄は雜錄なり。その一氣呵成の快文字なると精細なる學術的記載の文字なるとを問はず、隨筆なると紀行なるとを問はず、自今紙面の許す限りは普く諸君の玉什を網羅すべければ續々諸君の健筆を示されんことを望む。且論説欄の投稿も今少し饒多ならんことを請ふ。課外講義。吾人は毎號此種の報導の筆を執るを喜ぶ。此頃硯友會の諸氏は下村先生に讀みて源氏物語の講義を聞けり。聽者多く、爲に凡庸不足

立て傍聴したるものありといふ。

炊事委員 學隙を偷んで炊事の業に執掌す、其勞亦多といふべし。況んや委員長をや。然れども君汲川流我拾薪なる詩中の書生に比すれば、一帳簿の受授、二三物品の購收何かあらん。宜しく努力一番。簋鋼皿碗の間より、所謂同朋自相親の歡を湧起せんことを期して可なり。吾人は必ずしも清黨を願はず、腐穢ならざれば默す。吾人は必ずしも腴味を貪らず、消化物なれば關せず焉。今第二學期の委員長兼會計係長とて神代澤一君、購入係長として平山卯之助君、保管係長と木村林二郎君當選せらる。蓋第二學期は時日最短なるを以て、諸君の伎倆を顯す餘地なけんも、諸君の學才能く經濟的に最廉の食費を收めて、最上の滋味を備へ、生理的に蛋白質以下の三要素を按じて、同種の繕を續け様に響せられざらんことは、信じて疑はざる所なり。

三部生の端艇競漕 歲末の誌上に吾人は端艇の加繕成りしを報じ、其氣焰の揚らんことを囑せるに、果せる哉別項載するが如く、筑紫海第一回の端艇遠航を見、今又來る十四日を卜して、明治

丁酉第一回三部生聯合競漕會の舉めらんとす。

嗚呼創立以來正に一歳、其間の經歷人目を惹くに足ること多々なり。望みあり端艇部、附屬の名稱を脱して、純然たる本會の一部とならんことを。勉めよや有志諸君。

日清陸戰史 内田佐久間其他諸先生諸特志家の寄贈書籍は、以て雜誌部の附屬文庫を爲し、現に同窓を益すること鮮少にあらず。頃日芝園片嶺氏新に題號の大著を求めて投與せらる。感荷何ぞ堪へん。

猛省を要す 吾人の學を爲す豈に糊口の爲めのみならんや、道を脩め世を益するを主眼とすること論を俟たず。即ち之を小にしては闔校を熱愛し、闔校の美風を煥輝し、以て尋中以下天下學生の模範となり、越て世道人心を感化せざるべからず。翻て一般を顧みるに幾何か此氣象の銷せるを覺ふるなき乎。殊に上級生の頗々自便を計るに至つては容易に意を解せざるなり。過日校長の注意豈に偶然ならんや。吾人須らく猛省を要す。

○年賀狀

乾坤一周して、萬象盡く麻暢し、淑氣氤氲、龍南
 閉暗の堂に滿つるや、履端の賀章陸續として我
 會に來る。即ち茲に芳名を列記之、聊か光顧の榮
 に答へ、併而諸彦の清康萬福を頌に祈る。

堀	貞	十時	彌	龍南同窓會
小竹	寬	和木	貞	渡邊
川村景敏	加藤秀治	川田鉄彌	糺	
勝部國之助	賀來佐賀太郎	辛島	涉	
吉野五六郎	第五回卒業生	高木敏雄		
筒井保兒	中山秀之	野口彌三		
野中季雄	太田重知	大野盛郁		
尾形次郎	大西虎次郎	黒本植		
隈本繁吉	日下部義太郎	久保維脩		
矢津昌永	山川端夫	安河内麻吉		
安河内健次	山踏魁太郎	丸岡平造		
牧山熊二郎	松井元興	古森幹枝		
江口俊博	朝山景秀	北原友二		
湯原元一	三根正亮	宮崎操		
白河次郎	白壁潔次郎	島村鷹衛		
下山陸治	東武平	森田一雄		
杉山富樫	(いろは順)			

前號紙上擊劍紅白勝負言評中第六
 十七頁下段第二行我此度の戦に云
 々より愛嬌武者に至る迄の文字は
 評者の誤に付取消す